

序章 本論文について

本論文『ラトヴィア語の動詞接頭辞付加 — 空間・時間・感情を表示する言語活動 —』は、アスペクト論と語形成論に基づいた、ラトヴィア語の動詞接頭辞付加に関する研究である。本章は、問題意識や学術的意義、使用する言語資料を概略する序章である。

なお題目中の「時間」とは、本論文で論じるアスペクトと理解する。

0.1. 本論文の目的と構成

本論文の目的は、以下の5つである。

- ・空間的意味とアスペクト的意味を持つ動詞接頭辞を概略し、動詞接頭辞が関わるアスペクト対立を論じる（第1章、第2章）。
- ・活動的性格が顕著な借用語の動詞への接頭辞付加の傾向や過程を論じる（第3章）。
- ・言語文化論という規範主義的な立場から批判されているパーフェクティブ（本論文では以降 PFV）化の接頭辞付加を接頭辞 no-を例に分析し、言語の実態に基づいた記述的研究を行う（第3章）。
- ・動作の少量性を示す接頭辞 pa-と指小辞を関連させ、個別のアスペクト的意味を通じてアスペクトと主観的評価のつながりを探り、動詞接頭辞付加に感情的側面があることを示す（第4章）。
- ・テキストや発話における接頭辞の顕在化を通じて、動詞接頭辞がコミュニケーションの上で大きな役割を果たしていることを示す（第5章）。

本論文の構成は次の通りである。

序章にあたる本章では、本論文の問題意識や目的と構成、本論文の学術的意義、言語資料の特徴や用例収集の説明を示す。

第1章では、ラトヴィア語の動詞接頭辞の先行研究や記述を整理し、接頭辞の主な3つの意味（空間的意味、形式的意味、量・時間的意味）を概略する。

第2章では、動詞接頭辞が関与するアスペクト対立の先行研究を整理し、アスペクト対立の形態的・意味的対立を概略し、アスペクト対立の相対性を論じる。これは第3章で扱う言語文化論で批判される PFV 化の接頭辞付加をアスペクト論から説明するために必要である。

第3章では、借用語の接頭辞付加を語形成論とアスペクト論の立場から記述する。語形成論からは、接頭辞付加の数的動向を調査し、接頭辞付加のメカニズムである類推を論じる。アスペクト論からは、言語文化論で批判される PFV 化の接頭辞 no-に焦点をあて、借用語の動詞の PFV 化を説明する。付加率の高い他の接頭辞 (sa-と iz-) と比較し、接頭辞 no-が、無接頭辞動詞（本論文では基動詞と呼ぶ）との語彙的関連性が希薄で、空間的意味を

経由せずに基動詞を PFV 化していることを明らかにする。

第4章では、“少し”の動作を示す接頭辞 *pa-* の付加された動詞（本論文では *pa-* 動詞と呼ぶ）と名詞の指小形を比較し、アスペクトと感情的側面のつながりを明らかにする。品詞は異なるものの、*pa-* 動詞と名詞の指小形は動作やものの“小ささ”を示す一方で、話者の主観的評価を表出する点で共通している。感情的側面の表出に使用場面の制約があるゆえに、言語文化論で批判されることも両者に共通している。

第5章では、基動詞と接頭辞動詞、同じ接頭辞を持つ異なる基動詞、異なる接頭辞を持つ同じ基動詞がテキストや発話で用いられることで接頭辞の意味が顕在化する場面を分析し、コミュニケーションにおける接頭辞の役割を論じる。特に類義要素の追加を含む言い直しといった話し言葉に特有の現象に見られる接頭辞動詞の分析から、発話の流れの中の接頭辞付加や“接頭辞の選択”という新しい接頭辞研究の様相を明らかにする。

第6章では、本論文の結語と今後の課題を述べる。

参考資料には、借用語の基動詞と接頭辞動詞をまとめた『借用語の動詞リスト』がある。

本論文の各章は、本論文筆者による以下の論文が元となっている。

第2章

「ラトヴィア語のアスペクト対立とその表現の選択性」『語学研究所論集』東京：東京外国語大学語学研究所, No.15, 2010, 131-150.

第3章

「ラトヴィア語のアスペクトペアの形成—外来語起源の動詞 *instalet* を例に」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』東京：東京外国語大学, No.6, 2010, 15-26,

Perfektīvie citvalodu izcelsmes no-verbi plašsaziņas līdzekļos. 和訳：「マスメディアにおけるパーフェクティブの借用語の *no-* 動詞」 *Vārds un tā pētīšanas aspekti.* 15 (1). Liepāja : Liepājas Universitāte, 2011, 100-108.

Prefixation of foreign-origin verbs in Latvian. Res Humanitariae. 10. Klaipēda : Klaipēdos universitetas, 2011, 216-233.

Priedēkļi kā internacionālismu „nacionalizācijas” līdzekļi. 和訳：「国際的借用語の“民族化”の手段としての接頭辞」 *Valoda : nozīme un forma. Teorija un metodoloģija latviešu valodniecībā.* Rīga : Latvijas Universitāte, 2013, 45-56.

第4章

Latvian attenuative pa-verbs in comparison with diminutives. Contemporary Approaches to Baltic Linguistics. Amsterdam : Mouton de Gruyter. (出版予定)

第5章

Priedēkļa aktualizācija saziņā. 和訳：「コミュニケーションにおける接頭辞の顕在化」 *Via Scientiarum*. 1. Ventspils, Liepāja : Ventspils Augstskola, Liepājas Universitāte, 2012, 137-148.

Priedēkļverbi runā : labošanas un sinonīmu pievienošanas aspekti. 和訳：「発話における接頭辞動詞一言い直しと類義語の追加の観点から」 *Vārds un tā pētīšanas aspekti*. 16 (1). Liepāja : Liepājas Universitāte, 2012, 90-98.

0.2. ラトヴィア語

ラトヴィア語 (latviešu valoda) は、リトアニア語とともに印欧語族のバルト語派に属する言語である。バルト3国のラトヴィア共和国の唯一の国語であり、国内の総人口約221万人のうち、人口の約59.4%を占めるラトヴィア人の母語であり、国内に暮らす37.3%のロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人などにも解される¹。

書記法にはラテン文字を使用し、一部の文字に弁別記号を用いる。āやēなど母音の長音を示す長音記号(˘)が母音字の上につくほか、šやžなどチェコ語で用いられるハーチェック(ˇ)や, jやŋなど口蓋化子音を示す弁別記号(̣)を持つ子音字が存在する。

音声的特徴では、母音に長音と単音の区別があり、アクセントは固定アクセントで語頭の音節に置かれる。長母音や二重母音には、3種類の音節イントネーションが存在する。

屈折語に属し、性・数・格に応じた名詞、形容詞の語形変化がある。性は男性と女性、数は単数と複数、格は主格、属格、与格、対格、具格、位格、呼格の7つの格がある。

冠詞は存在しない。「定・不定」の意味カテゴリーを部分的に示すのは、形容詞の限定語尾と非限定語尾の対立である。限定語尾は、修飾する語の示す事物が特定で既知の事物や概念を示す。例えば、非限定語尾の *sarkana grāmata* 「赤い本」に対して、限定語尾の *sarkanā grāmata* は「特定の赤い本」、または絶滅危惧種を掲載する「レッドデータブック」を指す。

動詞には人称、数、時制に応じた語形変化がある。1人称と2人称では単数と複数の区別があるが、3人称では単数と複数の区別はない。時制は単純時制と複合時制(パーフェクト)に分かれ、それぞれに現在、過去、未来がある。分詞には、性・数・格に応じた語形を持つ能動現在分詞、能動過去分詞、受動現在分詞、受動過去分詞、性・数にのみ応じた語形を持つ半分詞、性・数・格に応じた語形を持たない副分詞、対格補語分詞がある。

法には、直説法、命令法、義務法、伝聞法、願望法の5つの法がある。

統語的特徴では、一般的な語順はSVOである。語順はテーマ・レーマの表示にも関与し、旧情報が文頭に、新情報が文末に置かれるのが普通である。

語彙的特徴では、印欧語族に共通の語彙 (*uguns* 「火」、*dievs* 「神」) を残すほか、ドイツ語 (*spēlēt* 「遊ぶ」、*tante* 「おば」) や、ロシア語を中心とした東スラヴ語 (*grāmata* 「本」、

¹ ラトヴィア共和国中央統計局 (Latvijas Republikas Centrālās statistikas pārvalde) (<http://csb.gov.lv>) の2011年6月現在のデータによるものである。

baznīca「教会」)、現在のラトヴィア地域の先住民リープ人のリープ語や、エストニア語などのウラル語族フィン・ウゴル語派の言語(vai「か(疑問の助詞)」、māja「家」)からの借用語彙がある。

方言は大きく3つに区分される。首都リーガを含む北東部を中心とし、標準語の基盤となっている中部方言、バルト海沿岸地域の南西部で話され、語末母音の消失で性の区別と格表示を失ったリープ方言、ロシアやベラルーシ、リトアニアと国境を接したラトヴィア東部で話され、「ラトガレ語」と個別の言語として称されることがある高地方言に分かれる。

0.3. 本論文の問題意識

本論文には大きく分けて2つの問題意識がある。それは、言語活動としての接頭辞付加と言語文化論(言語の規範と実態)である。“言語活動としての接頭辞付加 vs 言語文化論”の構図の中で、接頭辞付加を言語文化論からの制限やその根拠と対照させることで、これまでに見えてこなかった活動的な性格を持つ接頭辞付加の様相を明らかにする。

0.3.1. 言語活動としての接頭辞付加

本論文では、語形成論の観点から見た接頭辞付加の活動的側面、接頭辞を通じた話者の主観的側面の表示である感情的側面、その感情的側面と関係した表現的側面に着目し、接頭辞付加をひとつの言語活動として捉える。

0.3.1.1. 接頭辞付加の活動的側面

本論文の考察対象は動詞接頭辞であるが、本論文の題目を動詞接頭辞“付加”としたのは、接頭辞付加が話者を中心に据えた言語活動であると本論文筆者が考えるからである。

ロシア語の語形成論を論じる Zemskaia は、モノグラフ『活動としての語形成(Slovoobrazovanie kak dejatel'nost')』の中で、語形成の過程に「活動的性格(dejatel'nostnyj xarakter)」があることを強調している。その語の使用頻度に関わらず、「我々の眼前で生まれる語は、人間による一定の現実の捉え方、生活の現象に対する社会的、個人的評価を反映している」とし、語形成の動的側面の研究が、人間による世界像の構成のされ方を理解する手掛かりになるとしている(Zemskaia 2009, 201)。

語形成論では、語とその派生語の形態的・意味的関連性をモチベーションという。語形成論や語彙論、辞書論から独立した言語学の下位分野としてモチベーション論(motivology)を打ち出した、同じくロシアの Blinova は、話者がいかに語のモチベーションの関係をたどるかについての機能的側面を分析している(Blinova 2010)。Zemskaia の語形成論の考え方と共通するのは、言語研究において話者を中心に据えた人間中心主義(antropocentrism)で

ある。

言語活動として接頭辞付加を捉える *Zemskaja* に本論文筆者が賛同するのは、接頭辞を研究対象として選んだきっかけがある。ラトヴィア語では語の第一音節にアクセントが置かれる。語頭に位置する接頭辞は常にアクセントを持つことから、話者が接頭辞を強調して発音しているように聞こえ、聴覚印象の点で耳に残りやすい。また書記の点でも接頭辞は、元の動詞との境界の区別が容易である。接頭辞動詞を見聞きしてきた一外国人として、本論文筆者は「どうしてこの人はこの場面でこの接頭辞を使ったのか、他の接頭辞ではないのか、また逆にどうして接頭辞を使わないのか」という素朴な疑問を抱いてきた。

本論文で考察する接頭辞動詞には、伝統的な文法書や辞書には記述されておらず、後述するように規範主義の立場からは好ましくないとされるものがある。しかし規範主義の立場からみて逸脱とされる言語現象の背景には、規範か逸脱かどうかを気にする以前に、コミュニケーションのために言語活動を営む人間の存在がある。

本論文の第3章で扱う借用語の動詞への接頭辞付加には、特に活動的性格が強い。話者はコミュニケーション上の必要に応じて、借用語の動詞に接頭辞を付加する。この「付加」という過程に着目した際、ラトヴィア語本来の接頭辞動詞は誰がいつ付加して派生した語なのかという問題はなく、“気がついたら”接頭辞付加をされているのが普通である。“既製品”とも言えるこのような動詞に比べ、借用語の動詞への接頭辞付加で派生した語には、話者による“手作り感”が強く、接頭辞付加自体への話者の関与はより大きい。ラトヴィア語本来の接頭辞動詞は辞書に登録され、その言語の語彙体系に組み込まれているのに対し、借用語の接頭辞動詞は辞書に登録されていないことが多く、新語の性格が強い。この新語の性格により、動詞によっては具体的に誰がいつその動詞を派生させたのかを特定することも可能である(本論文3.3.参照)。

動詞への接頭辞付加は、元の動詞に空間的意味やアスペクト的意味、その他の語彙的意味を与える。本論文では、アスペクト対立が相対的であり、その表示も選択的であること(第2章と第3章)、借用語の動詞への接頭辞付加(第3章)、あるアスペクト的意味が動作や動作に関係する事象に対する話者の主観的評価を示すこと(第4章)、さらには話者が空間的意味やアスペクト的意味を言い直したり、繰り返すことで、話者の思考の過程を反映したり、確実にコミュニケーションをしようとする意志の表れでもある、言い直しや類義要素の追加において、接頭辞の選択をしているともいえる側面を論じる(第5章)。

よって、接頭辞付加は、新たな語の形成や接頭辞の選択(接頭辞を付加するか否か、付加するのであればどの接頭辞か)といった、話者の関与を要求する言語活動である。

0.3.1.2. 言語における感情的側面

言語は人間の意思疎通に欠かせない道具である。言語学が創始されて以来、その研究の中心となってきたのは、まぎれもなく文法である。一方でコミュニケーションには情報の

伝達や意思の表示の他に、感情の表示もある。

言語形式が表す内容に、主観的なものと客観的なものの対立があることは言われて久しい。例えばバイイは、文の意味に表象を構成する要素と、表象を受ける主体の心的操作の要素という二つの要素をそれぞれ事理 (dictum) と様態 (modus) としている (バイイ 1970, 27-28)。バイイがここで言う modus には、現代の言語学で一般に理解されるモダリティ、つまり事実に対する話者の希望や推測、蓋然性といった判断も含まれると考えられる。この dictum と modus に似た二項対立は、より文体論に根ざしたバイイの著作『言語活動と生活 (Le langage et la vie)』で示されている、事実判断 (jugement de fait) と価値判断 (jugement de valeur)、知的な (intellectuel) ものと情的な (affectif, émotif) もの、客観的な (objectif) ものと主観的な (subjectif) ものといった対立の構図にも見ることができる (Bally 1952, 17-20)。しかし人は完全に知的な形で思考や話をするとは決してないとし、知的要素と情的要素が思考において占める割合は変化しうるとも指摘している (Bally 1951, 7)。

言語における感情的側面の存在を認め、言語研究における感情性の重要性を強調する研究者に共通しているのは、人間が感情を持ち、コミュニケーションにおいて必ず何らかの心的状態にあるという前提である。Homo sapiens「知恵のある人」としてだけではなく、Homo sentiens「感情のある人」としても人間を捉え、言語における感情性をカテゴリー化するロシアの Šaxovskij もまた、「感情は人間の情念の表れであり、人間の生活のすべての分野を貫き、言語のすべてのレベルにおいて反映される」(Šaxovskij 2010, 8,13) としている。

感情は語彙論、形態論、統語論、また音韻論など言語学が対象としうる多くの分野において表現される。例えば、語彙論では個々の語彙や、類義語同士の相対的な感情性の度合い、形態論では語形変化や接辞の有無、統語論では語順、音韻論ではイントネーションや調音のヴァリエーションなどが挙げられる。

文法研究を中心としてきた言語学では、感情を周辺的で二義的な事象として扱うことが多い。また、感情はことばで命名されないほど無数に及ぶ上、実在として捉えにくく、客観的記述が難しい。Karavanov はロシア語における“少し”という動作を示す縮減アスペクトの接頭辞 po- が付加された po-動詞の研究において、主観的評価の言語化の難しさについて、「modus の意味²には曖昧さや、単純で理性的な言語に翻訳できない特徴があり、po-動詞の縮減の意味に理性的な定義を与えようと試みるたびに、何かを必然的に失ってしまう。縮減の po-動詞の意味の説明を試みることは、音楽を言語に訳そうとすることと同じである」と述べている (Karavanov 2004, 111)。

一般に言語における感情の研究においては、2 つ以上の言語形式を比較した感情的側面の有標・無標の概念が用いられることが多い。例えば名詞の指小形が感情的側面を持つことは、指小辞を持たない元の名詞との比較により際立つ。

日本語の例でも説明をしよう。2011 年 3 月に起きた福島第一原発事故後の原子力保安院の会見で広報担当者が「放射能の値が再び上昇してしまいました」と発言した。この言葉

² Karavanov の理解では、modus は話者の主観的評価といった感情を示す。

だけを聞いて、意識的にもしくは無意識にこの広報担当者に対する何らかの肯定的、または否定的な心理的反応が聞き手に生じたかもしれない。肯定的・否定的という両極端の心理的反応を聞く人にもたらす可能性があることを説明するには、「放射能の値が再び上昇しました」という文と比較をする必要がある。どちらも「放射能の値の上昇が起きた」という事実を伝えている点では共通している。しかし、実際の会見で用いられたこの完了のアスペクト（少なくともアスペクト論ではそう説明されるだろう）を示す「しまう」は論理的な完了という説明を飛び超え、ここではコントロールができないこと、予想外のことが起きてしまったこと、事実に対する残念さといった話者の主観的な態度を示す。主観的評価を表示することは、出来事に対する自身の心理的な関与を表明することでもある。それに対して「上昇しました」には自身の心理的な関与は見られず、そこには事実の確認しかない。

広報担当者以前に、一人の人間としての感情が示されたこの発言を受け止めた我々の評価は様々であろう。本来コントロールすべき立場の者が「上昇してしまいました」ということでコントロールできないことを認めるとは何事か、事態を他人事と考えているのかといった否定的な評価があるだろう。一方で、単なる事実の報告である「上昇しました」という文と比較して、過酷な現実を無味乾燥な形で国民に突きつけず、自身の出来事への心理的な関与を、感情的側面を持つ言語形式を通じて表明することで、国民と同じ立場に立っているという肯定的な評価もあるだろう。

しかし私達は言語研究から離れた言語生活において、実現されなかった言語形式（この場合「上昇しました」）をわざわざ持ち出して比較・考察をすることはなく、実現された言語形式をありのままに受け止めるものであることは、断っておく必要がある³。

本論文の第4章では、名詞の指小形とラトヴィア語のpa-動詞を相関させ、アスペクトと話者の主観的評価の結びつきを示す。言語における感情的側面は、感情性 (emotionality, emotivity) や情緒性 (affectivity) と呼ばれることが多いが、指小形の研究においては、指小形の言語形式に現れる感情的側面を主観的評価 (sub"ektivnaja ocenka) と呼ぶことから、本論文でも接頭辞付加の感情的側面を、話者の主観的評価が表出される側面と理解する。

この主観的評価は話者の肯定的・否定的な評価であり、その表示をするために言語形式を整えるには、話者の関与が必要である。本研究で論じる動詞接頭辞付加はその過程であり、話者の感情を示す側面を持った言語活動として捉えられる。

³ これに対して、本論文の第5章で論じる言い直しは、一般の言語生活においてよく観察され、言い直される言語形式と言い直す言語形式の両方が同時に実現する現象である。言語の感情的側面に関連した日本語の言い直しの例を挙げる。2012年4月23日に京都で少年の運転する車が登校中の児童の列に突っ込んだ事件で、事故後の現場検証の際の少年らの様子を近所の人が「…ただ立ってるだけで、突っ立ってるだけで…」とテレビのインタビューで証言している。「立っている」ことに変わりはないが、「突っ立っている」と言い直しを行うことで、何もしない少年らに対する否定的な態度を表明し、彼らを非難している。

0.3.1.3. 言語における表現的側面

感情的側面と常に密接に関わる側面には、言語における表現的側面がある。

言語における表現的側面は一般に表現性 (expressivity) と呼ばれる。ラトヴィアで発行された『言語学基本用語詳解辞典 (Valodniecības pamatterminu skaidrojošā vārdnīca)』(以下『言語学用語辞典』)によれば、表現性とは「テキストや個別の言語単位の表現力や働きかける力」であり、「文体的色調や感情的内容、肯定的・否定的評価や形象性といったコンテキストが言語単位の表現性を与える」としている(『言語学用語辞典』2007, 103)。

人間は話すこと、書くことで自己の思考、意志、感情を表現し、同様に聞くこと、読むことで他者の思考、意志、感情を受容する。ことばの他にも、手、肩や胸などのジェスチャーや姿勢、顔の表情によって意志や感情を示す。言語学が研究の対象とし得るのは、ことばによる表現であり、ことばによる表現を研究対象とするのは文体論である。

表現的とされる言語形式には、何らかの感情的なニュアンスが含まれていることが多い。しかし Galkina-Fedoruk が、感情的言語手段には常に表現性があるが、表現的な言語手段には感情性があるとは限らないとしているように (Galkina-Fedoruk 1958, 107)、表現性を生む文体的色調や形象性が必ずしも感情性の表出であるわけではない。なぜなら言語においては、情報伝達や意志、感情の表示だけでなく、いかに受容者である聞き手や読み手に注意を喚起させ、印象づけ、作用して、これらを表示するかも重要だからである。

ある言語形式における表現性の有無もまた、他の言語形式と比較して際立つ相対的な概念として捉えるとわかりやすい。例えば『言語学用語辞典』における「表現性」の説明には表現性を持つ例として、latvietis「ラトヴィア人」と比較した latvis「ラトヴィア人」(後者は古風で詩的)、動詞命令形 piecelieties!「起きてください!」と比較した命令の意味の動詞不定形 piecalties!「起床!」(後者は厳しい口調)、Es to nezinu「私はそれを知らない」と比較した Kā lai es to zinu!「私がそんなこと知るか!」(後者は反語)が挙げられ、それぞれ後者の語や文が表現的であるとされている(『言語学用語辞典』2007, 104)

感情的側面が表現的側面と結びついている点では、本論文の第4章のアスペクトと感情的側面の関わりにおけるpa-動詞が挙げられる。いかに受容者の印象に残り、作用するのかという点では、第3章の借用語の接頭辞動詞の新語的性格、第5章の接頭辞の頭在化における接頭辞付加の表現的側面が見られる。接頭辞付加の表現的側面にも、話者の感情の表出や、受容者に印象づける言語使用という点で話者の関与を要求する活動的性格が見られる。

0.3.2. 言語文化論 — 規範と実態

言語には規範が存在する一方で、逸脱とみなされるものも必ず並行して存在する。規範からの逸脱を言語研究においてどのように扱うか、規範からの逸脱を言語研究において周縁的なもの、取るに足らない現象として軽視してもよいのか。フランス語を例に Frei は、

いくつかの“欲求”で言語の変化の理由と、逸脱の背景を説明している (Frei 1982)。

ラトヴィア語の規範と実態を考察する上で、規範と逸脱の衝突を提示してくれるのが言語文化論 (valodas kultūra) である。学問としてのラトヴィア語学を社会や個人に対峙させた時、直訳するところの「ことばの文化、ことばを育むこと」である言語文化論は、非常に重要な役割を果たしてきた。この言語文化論は、ラトヴィア語学の中で常に一定の位置を占め、「論」と呼ばれるにふさわしい、ラトヴィア語学の下位分野の一つである。

『言語学用語辞典』では、言語文化論に2つの説明がなされている。第1の説明には「文化的価値としての言語、言語の発展において、一定の期間における言語の使用を研究し、言語体系の発展の法則と傾向を考察した上で、表現の明瞭さと豊かさ、言語の長期的発展を促し、言語のより良い使用のための推奨例 (見本) を考案する言語学の下位分野」とあり、第2の説明には「民族の共通語としての標準語を育み、正書法と正音法の規範に応じた維持と、具体的なコミュニケーションの状況に即した表現手段をうまく選んだ使用」とある (『言語学用語辞典』2007, 419)。この第2の説明は、広くことばのエチケットやことばの技巧と捉えられる。本論文で扱う言語文化論の定義は、言語学の下位分野とされる第1の説明に相当するものである。

言語文化論で論じられる言語現象は、文法から文体、また適切な言葉の使用を推奨するものなど、言葉に関わる現象すべてに及んでいる。文法においては、名詞の曲用や動詞の活用に見られる文法形式のヴァリエーションといった形態的問題から、語順などの統語的問題などがある。語彙においては、語の意味変化や翻訳借用などが挙げられる。

「言語のより良い使用のための推奨例 (見本) を考案」という前述の『言語学用語辞典』の第1の説明であるように、指摘される現象がいかなるものであれ、それには言語学者が推奨案が必ず付随される。トーンの違いこそあるものの、pareizi「正用」、vēlams「望ましい」、jābūt「こうあるべき」のような評価が言語学者の推奨案に、nepareizi「誤用」、nedrīkst「こうあってはいけない」、nevēlams「望ましくない」、lieks「余計」、nevajadzīgs「不必要」のような評価が、逸脱とされる現象に対して下されている。

このような言語学者によるやや主観的で感情的な指摘は、規範主義を取らない一部の言語学者によって近年懐疑的に見られ始めている。例えば Veisbergs はピューリズムを論じる中で、借用語や外国語らしい (ラトヴィア語らしくない) 表現への否定的な評価や言語文化論の権威主義に言語学的な根拠がないことを指摘している (Veisbergs 2006)。

それでも言語文化論は、ラトヴィア言語学の下位分野として常に一定の地位を保ち、役割を果たしてきた。その背景には、これまでの他民族による支配や、国内の社会言語学的状況を鑑みた際に、言葉と民族のアイデンティティーの結びつきがラトヴィア人にとって今日まで非常に密であったことがある。

ソ連時代の1965年からソ連崩壊後の1993年まで毎年1巻ずつ発刊された『ラトヴィア語言語文化の諸問題 (Latviešu valodas kultūras jautājumi)』、また2005年から現在は『言語の実態—考察と推奨 (Valodas prakse : vērojumi un ieteikumi)』と名前を変えた言語文化論に関

する雑誌が年に 1 巻発刊されている。ラトヴィア語学の研究者の多くが、このような言語文化論を扱う雑誌に一度は寄稿している。

Freimane の『理論的見地から見た言語文化論 (Valodas kultūra teorētiskā skatījumā)』は、ラトヴィア語の言語文化論を体系的にまとめた今日まで唯一のモノグラフである (Freimane 1993)。言語学における言語文化論の位置づけや他国における言語文化論の概要を論じ、ラトヴィア語学における音声論、形態論、統語論、語彙論などすべての分野で観察される規範からの逸脱を整理している。

国営ラジオでは 5 分程度の言語文化の番組『私たちの言語 (Mūsu valoda)』が放送されていた (2003-2006 年、2007-2009 年)。巷の書店にもラトヴィア語の文法書の横に言語文化論の本が並ぶ。電子媒体の新聞記事の読者のコメント欄には、記者や政治家の使う語彙や表現に対する批判やその擁護といった言語使用を巡る議論がなされることも珍しくない。

ラトヴィア語学の祖 Jānis Endzelīns (1873-1961) は、多大な言語学の成果の傍らで、言語文化論のエッセイを数多く残している。彼の著書『様々な言葉の誤り (Dažādas valodas kļūdas)』は、1932 年の第 1 版が改訂されないまま 1994 年に第 5 版が出ているが、Grīse はその前書きで以下のことを述べている。「(Endzelīns は) 望ましくない借用語や、翻訳借用、正しくない新語やその他の不要な要素の代わりになるべき、ラトヴィア語的で、標準語的に正しいものを提示する。なぜならこれらは表現面における民族的な特徴や規則を薄め、標準語の質を低下させ、気づかぬうちに母語を破滅へと導き、言語とともに民族も滅ぼしてしまうからである」(Grīse 1994, 5-6)。

“言語は民族そのものであり、民族は言語そのものである” という言説は、ラトヴィア国内の民族構成や、民族や国としてのアイデンティティーの探求といった社会的な状況を考慮に入れると、21 世紀の今日もアクチュアルなものである。このように、言語文化論はこれまでにラトヴィア社会に根づき、言語学と社会、そして言語学者や文化人のような言語意識の高い人とそうでない人をつなぐ役割を果たしてきた⁴。

その一方で、言語文化論で指摘される批判対象とそれに必ず付随する推奨例は、言語意識の高い者と低い者が平行して存在し、同じ言語を話す集団内で各人が異なる言語感覚を持っているという当たり前の事実を浮き彫りにしている。

本論文で扱う動詞の接頭辞付加も例外ではなく、言語文化論の批判対象としてしばしば扱われてきた。ラトヴィア語の言語文化論で最も批判される接頭辞付加は、基動詞の借用語を PFV の動詞⁵にしてアスペクト対立を示す接頭辞付加で、余剰な PFV 化の接頭辞付加とされてきた (Ozola 1984, Kalna 1988, Freimane 1993, Kušķis 2006, 2009 ほか)。

どの批判にも共通する根拠は、元の動詞の語彙的意味に PFV の意味が認められることで、接頭辞付加によりその動詞の PFV の意味を強調することが不要であることである。この現象の影響として指摘されるのは、語の形態的構造が元々似ており、なおかつ接頭辞自体に

⁴ 言語の規範主義 (prescriptivism) と社会に関する考察は、Strelēvica-Ošīņa を参照されたい (Strelēvica-Ošīņa 2012)。

⁵ アスペクトに関する詳しい概念は本論文の第 2 章で論じる。

も形態的、意味的類似性や対応関係が認められ、形態的にアスペクトを表示するロシア語の接頭辞動詞のモデルの影響である (Ozola 1984, 127-128)。ロシア語の影響は必然的に避けるべきであるという、言語文化論によく見られる感情的な理由もこの批判に関係している。また言語文化論では、“少し”という動作の少量性を示し、不真面目な態度を示すとされる接頭辞 *pa-* が付加された動詞の使用も制限されている (Freimane 1993, 158)。

0.4. 本論文の学術的意義

本論文の学術的意義を4つ挙げる。

アスペクト論への新しい視座

これまで記述されてこなかった対立アスペクトの意味対立やその相対性、タクシスや時間補語といった統語的特徴を第2章で明らかに示した点で、ラトヴィア語のアスペクト論に大きな貢献となった。

第3章では、第2章の結果を元に、言語文化論で批判されてきた借用語の動詞のPFV化をアスペクト論から、より言語の実態に即して再解釈を行った。アスペクト論の先行研究では借用語の動詞のPFV化の広範な記述が皆無であったため、アスペクト論に最新の記述とデータを提供した。アスペクト対立を形成する接頭辞には、接頭辞自体の意味も関係している。他の接頭辞と比較をすることで、特に付加率の高い接頭辞 *no-* がアスペクト対立の表示に特化しているという特徴も明らかにした。

第4章では、個別的なアスペクトの意味（ここでは“少し”）が主観的評価に関わっていることを接頭辞 *pa-* を例に示し、感情的側面や表現的側面といった新たな視座をアスペクト論に加えた。

第5章で広く論じた言い直しの現象の中には、アスペクト的意味の言い直しがある。このことは、話者のアスペクトの視点が最初から強く定まったものでなく、あくまで調整が可能な概念であることを示唆している。

借用語の動詞の接頭辞付加の記述

これまでの借用語の動詞の接頭辞付加の記述は、言語文化論によるPFV化の接頭辞付加の批判がほとんどで、アスペクト論や語形成論では、接頭辞付加のメカニズムや傾向は特に記述されてこなかった。本論文では、言語文化論に一石を投ずる形で借用語の動詞の接頭辞付加を論じたが、数量的な傾向や類推という接頭辞付加のメカニズムを豊富な用例を用いて論じることで、アスペクト論や語形成論のみならず、語彙論にも大きな貢献となった。

『新聞図書館』で得られた用例や1230の借用語の動詞とその接頭辞動詞を挙げた参考資料『借用語の動詞リスト』は、活動的性格の強いラトヴィア語の借用語の動詞の接頭辞付

加の最新の動向を知る上で貴重な資料である。例えばこの『借用語の動詞リスト』の接頭辞ごとの列を見ることで、本論文では詳しく論じなかった各接頭辞の語形成論や意味論、語彙論の記述に大きく役立つ。

数量データに基づいた接頭辞研究

ラトヴィア語学では、計量的手法を取り入れた言語研究はこの数年で盛んになり始めたばかりである⁶。計量的手法には、大量のデータをもとに数値化された客観的な分析ができる長所がある反面、データの偏りや収集方法の問題はもちろんのこと、客観化しにくい意味の分析や、話者の意図や文脈といったコミュニケーションを考慮にいれた言語の分析は、数量データからは必ずしも見えてこないという短所もある。

本論文の第3章の借用語の動詞の接頭辞付加では、技術的に可能な範囲で、また論旨に応じて必要な範囲で数量データを利用した。接頭辞の中には特に付加されやすい接頭辞があることはアスペクト論で指摘されてきたが (Staltmane 1958d, 58)、『新聞図書館』の大量のデータに基づいた、借用語の動詞における接頭辞動詞の割合や、各接頭辞の付加率といった数量的な調査は、アスペクト論、語形成論や語彙論の接頭辞研究にはなかった研究成果である。

文脈やコミュニケーションの問題を考慮に入れた接頭辞研究

文脈やコミュニケーションの問題を考慮に入れた接頭辞研究は、数量データの利用の短所を補う。

接頭辞に関わるアスペクト論と語形成論では、接頭辞(動詞)を文脈から切り離れた記述が多かった。例えば従来のアスペクト対立の研究では、PFVとインパーフェクティブ(本論文では以降IPFV)それぞれの用例を異なるテキストから使用したり、接頭辞の意味研究では文脈を考慮に入れない記述が大半であった(『標準語文法』1959、Staltmaneなど)。

本論文では、アスペクト対立が顕在化しやすい用例、同じテキスト内や同じ文中、似たテキスト間でアスペクト対立が見られる用例を示した。また類推の原則といった接頭辞動詞が生まれるメカニズムや、テキストの校閲という“人の手”で削除される接頭辞や、コミュニケーションにおいて接頭辞(動詞)が顕在化する過程を文脈とともに分析することで、言語活動としての接頭辞付加の様相を浮かび上がらせた。

コミュニケーションの道具としての言語の研究では、書かれた言葉と話された言葉の両方を研究する必要がある。しかしラトヴィア語学では書かれた言葉の研究が中心であり、話された言葉の研究はいまだに少ない。その点で、接頭辞動詞が関与する言い直しや類義要素の追加の用例自体が話された言葉の貴重な言語資料であり、このような現象における接頭辞動詞の研究は、“発話の中の接頭辞付加”という全く新しい視座を提供する。

⁶ ラトヴィア語学におけるコーパス開発やコーパス言語学の現状については、Grūzītisを参照されたい (Grūzītis 2012)。

0.5. 本論文の言語資料

本論文では新聞や雑誌、ラジオといったマスメディアを主な言語素材としている。

マスメディアは日々刻々と変わる現代社会を反映するが、言語研究においてマスメディアの言語は、通時的に観察される変化や共時的に観察されるヴァリエーションの文法的・語彙的研究に使用されることが多い。これは、マスメディアの言語が文学作品や事務文書といった他の文体に比べて、社会生活における変化にいち早く反応する (Lokmane 2009a, 4) ことと関係している。ラトヴィア語と同様に政治体制・社会体制の変化を経験したロシア語でも、マスメディアの言語に影響を及ぼす言語外の要因として、政治体制やマスメディアの機能の変化、言論の自由や報道の自由、メディア間での競合などが挙げられる (『ロシア語文体論百科事典 (Stilističeskij ènciklopedičeskij slovar' russkogo jazyka)』2003, 664-675)。

マスメディアは社会全体に向けられている点でも重要である。これには情報化社会といった現代社会の特質が背景にある。Kalnača によれば、「文学作品が教養と芸術的素養のある読者に向けられるエリート的な言語変種であるのに対し、マスメディアの言語は、それが紙媒体か電子媒体かに関わらず、多種多様な内容の時事を社会の各構成員のために提示する、規範化された言語の中でも最も民主主義的な変種」である (Kalnača 2009, 59)。社会全体に向けられているが故に、マスメディアの言語は「言語使用者が気づかないうちに、社会の書き言葉、話し言葉にも影響を及ぼす」 (Lokmane 2009a, 4)。

マスメディアは言語の標準化や規範の強化において重要な役割を果たすことも事実であるが、ラトヴィア語の言語文化論では、有力紙の新聞記事のテキストや新聞記者の言語使用が批判されることが珍しくない。しかし上で述べたように、マスメディアの本質や、そこで使われる言語を取り巻く社会的要因を鑑みると、言語文化論でマスメディアの言語⁷が批判対象とされてきたことは、決して驚くべきことではない。ソ連からの独立後唯一の国語であるラトヴィア語の法的地位を高め、その使用を保障する点においては、政治家や言語学者の力が注がれ一定の成果が上がっていることは事実である。しかし言語文化論においてマスメディアの言語が批判されること、書かれた言葉による媒体ではテキストの校閲 (本論文 3.5.3.を参照) があるにも関わらず、言語文化論で批判される現象がマスメディアの言語に見られることから、言語の使用の“中身”、つまり言語内の文法的・語彙的側面には言語学者たちの“上からの”圧力が完全には及んでいないことがわかる。

以上のことから、マスメディアを言語資料に選ぶことで、規範と実態の衝突や揺れといった言語使用の現実を見ることができ、尚且つ今後の言語使用の展望についての示唆も得られる可能性がある。本論文の研究対象に照らせば、マスメディアの言語は、言語文化論で批判される一部の借用語の接頭辞動詞や新語としての借用語の接頭辞動詞の用例を収集し分析するのに適した言語資料である。

マスメディアには様々な媒体がある。本論文で主に使用する各媒体の特徴を説明する。

⁷ Liepa は、政治体制の転換に関連付けて、ラトヴィアにおけるマスメディアの社会的役割や、マスメディアの言語の特徴を包括的に研究している (Liepa 2011)。

0.5.1. 新聞

本論文の第2章から第4章で使用する例文の多くは、新聞から収集したものである。

新聞のような書かれた言葉としてのマスメディアの言語は、文学作品や事務文書、学術文書のように一つの文体として成り立つのか。『ラトヴィア語文体論 (Latviešu valodas stilistika)』でなされている社会機能に応じた文体の分類では、学術・一般教養の文体、事務文書の文体、会話の文体、文学作品の文体と並んで、社会・政治評論 (publicistika) の文体が挙げられている (Rozenbergs 1995, 82-83)。一方で Lokmane は「今日のマスメディアの言語は、文学作品の言語と同じように、民族の言語 (nacionālā valoda) の総体である」と結論づけつつも、マスメディアの言語には文体的に多様な要素が混ざり合っており、マスメディアの言語を個別の文体として特徴づけることは難しいとしている (Lokmane 2009b, 11-12)。

事実を客観的に述べる伝達機能の側面が強い「報道文」は新聞特有の文体として代表的であるが、それはあくまで一部にすぎない。報道文のほか、評論、小説、インタビュー、テレビ番組や映画のあらすじ紹介、アネクドット、情報、星座占い、料理のレシピ、法令文書、国会の速記録など、テキストのジャンルは多岐にわたり、それぞれに特徴がある。例えば、政治批判や文学作品や映画のレビューでは記者の主観的な批評が述べられ、インタビューでは話された言葉がある程度体現される。新聞記事で用いられる語彙も、文体的に格調高いものから、俗語とされるもの、高度な専門用語と極めて多彩である。

新聞自体にも一般紙だけではなく、ラトヴィア政府官報『ラトヴィア報知 (Latvijas Vēstnesis)』のように法令文書や国会の速記録、政治社会評論を中心に掲載する新聞から、いわゆるタブロイド紙のような娯楽的性格の新聞まで様々な性格がある。

以上のことから、特定の文体に偏らずバランスのとれた多様なテキストのジャンルを持つ新聞は、ラトヴィア語の接頭辞動詞を広く研究する上でふさわしい言語資料である。また以下で述べるように、用例収集の点でも新聞は最適な言語資料である。

用例収集には、ラトヴィアの IT 企業 Lursoft 社の『新聞図書館 (Laikrakstu Bibliotēka)』 (<http://www.news.lv>) を使用した。これは国内の新聞や雑誌の記事のデータベースである。

『新聞図書館』に登録されている最も古い記事は 1986 年 (年間を通じて 1 記事のみ登録) のものであるが、1997 年後半からは毎月 1 万本の記事が登録されており、2000 年からは毎月 2 万から 3 万 5000 本の記事が登録されている。2012 年 7 月末までに『新聞図書館』に登録されている記事数は計 480 万本に及ぶ。

このデータベースには語の検索機能がある。その拡張検索機能では語の検索の他、年月日の設定による特定の時間幅での検索、記事の筆者名による検索、特定の新聞や雑誌内のみでの検索が可能である。これにより、ある語の登場時期や年毎の使用の推移、同じ出来事についての記事間の比較、ある人物の発言の引用が各記事でどのように反映されるかの比較、ある記事が他の新聞でどのように転用されるのかの比較ができ、記事間の接頭辞の使用の有無や接頭辞の相違を確認できる利点がある。

『新聞図書館』にはロシア語 (メディア数 10)、英語 (メディア数 2) のメディアもある

が、本論文で扱うのは新聞や雑誌、インターネットサイトを含む電子媒体に特化した 64 のラトヴィア語のメディアである。表 0-1 に『新聞図書館』におけるラトヴィア語のメディア数の内訳をまとめる。

表 0-1: 『新聞図書館』におけるラトヴィア語のメディアの内訳

最終確認日：2012 年 8 月 2 日

| メディア形態 | メディア数 |
|---------------|-------|
| 新聞（全国紙） | 13 |
| （首都リーガ） | 2 |
| （地方紙） | 22 |
| 雑誌 | 14 |
| 電子媒体に特化したメディア | 13 |
| 計 | 64 |

0.5.2. ラジオ

本論文の言語資料として、ラトヴィア国営ラジオ『ラトヴィアラジオ (Latvijas Radio)』の第 1 チャンネルの番組『よりよく生きるには (Kā labāk dzīvot?)』を使用した。この番組は同チャンネルの看板的な番組であり、平日の朝 9 時から 11 時まで生放送される。一日あたり 2 本のテーマから構成され、家庭料理や人間関係といった身近な生活の問題から、時事を含む社会問題や学術的内容などの多種多様な話題で、各テーマごとにゲストを招く。

司会者 1 人に対し、年齢、職業の異なるゲストが各回 1 人から 3 人ほど出演し、リスナーからの電話質問も行われる。この番組は、約 2 年分のアーカイブが同ラジオ局のホームページ上 (<http://lr1.latvijasradio.lv/zinas/g00001.htm>) でダウンロードできる。

本論文では言語資料として 2008 年分を計 9 本、2009 年分を計 12 本、2010 年分を計 80 本、2011 年分を計 49 本、合計 150 本を試聴した。最も古い番組の放送日時は 2008 年 11 月 6 日、最も新しい番組の放送日時は 2011 年 12 月 6 日である。

本論文筆者は、2012 年 1 月 19 日にこの番組のスタジオを見学させていただいた。このスタジオ見学により、会話の内容がある程度設定されているとはいえ、出演者があらかじめ用意されたテキストを読んでいないこと、また制作側が会話の臨場感を重視しているため、内容の打ち合わせを取って綿密には行っていないことを確認した。

年齢や職業が多様なゲストには、人前で話すことの慣れの差やよどみなく自分の考えを明確に伝える技術の差が明らかにある。しかし番組の司会者、ゲスト、また電話によるリスナーの発話にはポーズはもちろんのこと、日本語の「あー」「えーっと」「まあ」「なんというか」「その」のような言いよどみの際のつなぎの語であるフィラー (filler) や冗長語が多用される。

ラジオ番組のスタジオという空間、リスナーの存在の意識、ある程度の緊張感といった非日常的なコミュニケーションの要素はあるものの、格式ばらない番組の性格から、そこで話されている言葉は自然会話をある程度体現している。特に言い間違いの訂正、より適切な語や表現への言い換えや類義要素の追加といった、本論文の第5章で論じる「言い直し」という話された言葉に特有の現象を観察する上で豊富な用例を得ることができる。よってこのラジオ番組は、新聞や雑誌といった書かれた言葉とは異なる様相を持った話された言葉を広く捉えるのに適した言語資料である。

0.5.3. その他の言語資料

『新聞図書館』に登録されていないが、国内で人気の高い男性誌『クラブ (Klubs)』、女性誌『サンタ (Santa)』などの雑誌を目視し、本論文に関連する用例を収集した。

文学作品では Jānis Klīdzējs (1914-2000) の『人間の子 (Cilvēka bērns)』(1956) と Imants Ziedonis (1933-2013) の短編集『エピファニー (Epifānijas)』(1971) を使用した。特に Ziedonis は言葉遊びに長けた詩人として知られ、接辞を使った造語や言葉遊びを多用する。

『新聞図書館』では見つからない用例は、検索エンジン Google (<http://www.google.lv>) で収集した。ジャンルは主にブログである。

ラトヴィア民謡とラトヴィア語の合唱曲の用例もそれぞれ1例ある。

また本論文筆者の作例が4例、本論文筆者個人に宛てられたEメールと置き書きのメモからの用例が4例、本論文筆者がラトヴィアで耳にした用例が2例ずつある。

0.6. 本論文の用例

用例収集の方法や問題点を整理する。また参考資料『借用語の動詞リスト』を説明する。

0.6.1. 『新聞図書館』における用例収集

本論文で用いる用例の多くは『新聞図書館』内の語の検索機能によって収集した。

検索対象にアスタリスクをつけると、最低でもその部分までを含む語形が検索される。例えば第1変化の動詞 *paēst* 「ちゃんと食べる」の用例を検索したい場合、*paēd** と検索すると、*paēd* (直説法3人称現在)、*paēdu* (直説法1人称現在、1人称過去)、*paēdis* (能動過去分詞男性単数) などのような一連の変化形が検索される。具体的な時制形や分詞形を検索したい場合には、その語形に引用符 “ ” を付加するとその語形のみが検索される。

借用語の動詞は第2変化の活用タイプに属するため、不定形の語尾-tを除いた部分はすべての時制と人称に共通し、分詞形や動詞派生の名詞(抽象名詞、動名詞、行為者を示す名詞)の形成においても残る。本論文ではこれらの語も数量データに含めた。

否定辞 *ne-* と義務法の接頭辞 *jā-* が付加された語形 (*neēd* 「食べない (3 人称)」や *jaēd* 「食べなければいけない」) は検索していないため、動詞の件数には含んでいない。

検索欄には最大 3,4 語が入力可能で、接頭辞動詞と他の接頭辞動詞、または接頭辞動詞と基動詞が同時に使用されている新聞記事を検索することもできる。

検索結果として提示される記事の基本情報 (日時、新聞社、筆者) には、検索した語形とその前後の文脈 (前後最大で 10 語程度) も示されるが、検索する語の使用が本論文の関心に関わっていると判断された場合に記事本文を閲覧し、積極的に分析の対象とした。

0.6.2. 『新聞図書館』の問題点と数量データ

『新聞図書館』は言語研究のためのコーパスではないため、そこで得た数量データを扱うには、語の検索システムにいくつかの問題があることを指摘しておかなければならない。

第 1 の問題は、検索する語が同じ記事中で複数回使用されている可能性があることである。しかし『新聞図書館』では、語の使用回数を特定することは不可能であり、検索する語が 1 回でも使用されていれば、その記事を 1 件として表示するため、本論文で扱う件数は、問題の語が 1 回でも使用されている新聞記事の数である。

第 2 の問題は、新聞社間で記事の転載が行われることがあり、内容が全く同じ記事が重複して検索されてしまう点である。重複する記事を検索対象から外すことは技術的に不可能である。接頭辞動詞の件数が少ない場合には記事の重複に気づくことができるが、用例が多い場合には重複した記事を見つけることは難しいため、重複する記事は基本的にすべて接頭辞動詞の件数の総数に含まれている。

第 3 の問題は、品詞を特定した検索ができないため、動詞と関係のある他の品詞や全く関係のない語も検索されることである。これは特に語が短い場合に生じる。例えば動詞 *stopot* 「ヒッチハイクをする」を不定形語幹部分の *stopo** で検索すると、*stopover* という英語の単語や *Stoponišs* (名字) という固有名詞も検索されてしまう。また動詞不定形が *plānot* 「計画する」の場合、“*plāno*”のように語幹を指定する引用符による検索でも、同一の形をした他の品詞の変化形が検索されてしまう。囲み部分が本研究に必要な語形である。

“*plāno*” 動詞 *plānot* 「計画する」直説法現在 3 人称

“*plāno*” 形容詞 *plāns* 「平らな」限定形・男性単数対格、限定形・女性単数対格

“*plānos*” 動詞 *plānot* 「計画する」直説法未来 3 人称

“*plānos*” 形容詞 *plāns* 「平らな」非限定形・男性複数位格、限定形・男性複数対格

“*plānos*” 名詞 *plāns* 「計画」複数位格

*pa*plānot 「少し計画する」のような接頭辞動詞でも同様である。

“*pa*plāno” 動詞 *pa*plānot 「少し計画する」直説法現在 3 人称

“paplāno” 形容詞 paplāns 「結構平らな」限定形・男性単数対格、男性複数属格
限定形・女性単数対格、女性複数属格

“paplānos” 動詞 paplānot 「少し計画する」直説法未来3人称

“paplānos” 形容詞 paplāns 「平らな」非限定形・男性複数位格、限定形・男性複数対格

接頭辞のついた語の検索でも、他の語と語形が偶然一致してしまうことがある。例えば借用語の動詞 kopēt 「コピーする」に接頭辞 sa- を付加した sakopēt 「たくさんコピーする」の用例を得るために sakopē* で検索をすると sakopt 「清掃する」の行為者名詞 sakopējs 「清掃人（男性）」や sakopēja 「清掃人（女性）」の変化形も検索されてしまう。

検索したい語が動詞であることを示すために、検索条件の sakopē* にもう一字付け足すことにより、本研究の目的と関係のない語が検索される可能性は低くなる。この場合、下線部が引かれた5通りの検索条件で得た件数の総数を動詞の件数とした。

| | | |
|---------------------|-----------------------------|---------------------------------|
| “ <u>sakopē</u> ” | <u>sakopē</u> | 直説法現在2人称単数、3人称 |
| “ <u>sakopēs*</u> ” | <u>sakopēsi</u> | 直説法未来2人称単数 |
| | <u>sakopēs</u> | 直説法未来3人称 |
| | <u>sakopēsīm</u> | 直説法未来1人称複数 |
| | <u>sakopēsīt, sakopēsīt</u> | 直説法未来2人称複数（ヴァリエント） |
| “ <u>sakopēš*</u> ” | <u>sakopēšu</u> | 直説法未来1人称単数 |
| | <u>sakopēšana</u> | 動名詞主格、およびその他すべての変化形 |
| “ <u>sakopēt*</u> ” | <u>sakopēts</u> | 受動過去分詞すべての変化形 |
| | <u>sakopētu</u> | 願望法すべての変化形 |
| “ <u>sakopēj*</u> ” | <u>sakopēju</u> | 直説法現在1人称単数、過去1人称単数 |
| | <u>sakopēj-</u> | その他の過去の人称形、能動現在分詞、受動現在分詞すべての変化形 |

しかし上で挙げた具体的な語形の指定検索をしても、以下のように関係のない語が検索されてしまうこともある。

“sakopēju” 動詞 sakopēt 「たくさんコピーする」直説法現在、過去1人称単数

“sakopēju” 名詞 sakopējs 「清掃人（男性）」単数対格、複数属格

“sakopēju” 名詞 sakopēja 「清掃人（女性）」単数対格、複数属格

“sakopēji” 動詞 sakopēt 「たくさんコピーする」直説法過去2人称単数

“sakopēji” 名詞 sakopējs 「清掃人（男性）」複数主格

“sakopēja” 動詞 sakopēt 「たくさんコピーする」直説法過去3人称

“sakopēja” 名詞 sakopējs 「清掃人（男性）」単数属格

“sakopēja” 名詞 sakopēja 「清掃人（女性）」単数主格

“sakopējām” 動詞 sakopēt 「たくさんコピーする」直説法過去 1 人称複数

“sakopējām” 名詞 sakopēja 「清掃人（女性）」複数与格

このように引用符をつけた語形の指定検索を行っても研究の目的と関係のない語が検索されてしまう場合には、可能な限り文脈で品詞を特定し、関係のない用例は除外した。数量データに確実性がない場合には、参考資料の『借用語の動詞リスト』の数字の横にクエスチョンマークを記した。

第 4 の問題は、動詞の再帰要素⁸である。再帰要素は再帰の意味の他、接頭辞とセットで特定のアスペクトも表す。例えば strādāt 「働く」に接頭辞 iz-と再帰要素が付加された izstrādāties は、接頭辞動詞 izstrādāt 「作成する」に再帰の意味が加わった「作成される」という意味がある。しかし strādāt 「働く」に「十分な動作」を示す接頭辞 iz-と再帰要素のセットが付加された izstrādāties には「十分に働く」という意味がある。

1 つの動詞がどちらの意味も持ちうること、また再帰要素を含む接頭辞動詞と含まない接頭辞動詞を検索システムで分けることは技術的に不可能であるため、再帰要素を含む動詞も含まない動詞も件数に総計している。

第 5 の問題は、テキストの誤植である。例えば interesēt 「興味を持たせる」の接頭辞動詞 uzinteresēt*を検索すると、前置詞 uz 「に」と interesējošiem jautājumiem 「興味を持たせる質問」が分かれ書きされていない誤植 uzinteresējošiem jautājumiem 「興味のある質問に」も検索された。本論文筆者は気づいた範囲で用例の総数から誤植を外した。

以上のように『新聞図書館』にはいくつかの技術的問題があることを踏まえ、本論文では技術的に可能な限り正確化した数量データを使用する。

0.6.3. 参考資料『借用語の動詞リスト』

第 3 章で扱う借用語の動詞は、2008 年刊行の収録語数 2 万 5000 語の『借用語辞典 (Svešvārdu vārdnīca)』から 596 の動詞を収集した。さらに『ラトヴィア語逆引き辞典 (Latviešu inversā vārdnīca)』で -ēt や -ot で終わる借用語の動詞や、辞書には登録されていないが『新聞図書館』で基動詞や接頭辞動詞の使用が確認される計 634 の借用語の動詞を本論文筆者が加え、計 1230 の借用語の基動詞を収集した。

縦の列にはこれら 1230 の基動詞、横の列には 11 の接頭辞があり、『新聞図書館』で確認された接頭辞動詞の件数が記されている。『新聞図書館』では確認されず、ラジオ番組での

⁸ 再帰要素とは、再帰動詞の形態的標識-s である。これは古い前接的代名詞*si (sevi 「自分を」, sev 「自分に」) の名残である (『標準語文法』1959, 554)。再帰動詞は不定形を含むすべての変化形において、この形態的標識が人称語尾と一体化しているため、再帰要素と呼ぶのが簡便である。mācīt 「教える」とその再帰動詞 mācīties 「勉強する (=自分に教える)」の直接法現在形を以下で比較する。下線部は各変化形の人称語尾である。

1 単: mācu / mācos

2 単: māci / mācies

3 単・複: māca / mācās

1 複: mācām / mācāties

2 複: mācāt / mācāties

み確認された 13 の借用語の接頭辞動詞には、件数（すべて 1 件）の横に r を記した。これらの接頭辞動詞は参考資料の冒頭で示した。

意味は同じであるが書記と発音にヴァリエントがある動詞（šopingot と šopot 「ショッピングをする」、aktivet と aktivizēt 「活発にする」、tvīterot と tvītot 「ツイートする」、ekstragēt と ekstrahēt 「抽出する」など）は、リストではそれぞれ別の動詞として数えた。

再帰形が主に用いられる動詞は、再帰形をリストに挙げた（ballēties 「パーティーをする」や amizēties 「楽しむ」など）。

0.6.4. ラジオ番組の聞き取り

ラジオ番組からは、近い文脈で用いられている基動詞と接頭辞動詞、同じ接頭辞を持つ異なる基動詞、異なる接頭辞を持つ同じ基動詞や、それが言い直しに関与している用例、『新聞図書館』では検索されなかった借用語の接頭辞動詞の用例を中心に本論文筆者が聞き取り、文字化した。話された言葉の文字化の方法には諸問題が存在するが、本論文では書かれた言葉の用例との句読点法の区別は特に設けていない。

0.6.5. 文脈の重視

第 2 章から第 5 章を通じ、用例の解説ではテキストや発話の文脈を重視している。

本論文では、基動詞と接頭辞動詞、同じ接頭辞を持つ異なる基動詞、異なる接頭辞を持つ同じ基動詞が同一のテキストや発話で用いられる例を積極的に利用している。これには、新聞記事や発話といった一つのコミュニケーションの単位で用いられる接頭辞動詞の意味を観察する狙いがある。

接頭辞は多義的である。例えば接頭辞動詞 nodziedāt 「歌う」には「歌い終わる」という PFV の意味、「(2 時間) 歌う」のような動作が一定時間続く意味、「歌って (声を) つぶす」という「動作を行うことで何かをダメにする」という意味がある。そのため、文脈から切り離された接頭辞動詞は意味の解釈が難しいことが多い。

第 2 章から第 5 章を通じた文脈重視の理由は、章ごとで様々である。第 2 章では、動詞だけでなく構文や補語といった統語的現象がアスペクトに関わっている。第 3 章で扱う借用語の接頭辞動詞は、多くの語が辞書に登録されていないため、その意味の解釈には既存の語形成の知識に加えて、文脈による意味解釈が必要である。第 4 章では、主観的評価の意味を持つ pa-動詞を含むテキストに指小形や口語の語彙が多用されたり、テキストの性格や言語の使用場面といった考慮も必要となる。例えば、文脈から切り離した palasīt 「少し読む」だけでは主観的評価を認めることはできないが、ひとたび文脈の中に入ると主観的な意味を持つことがある。第 5 章では、実際のテキストや発話の中でいかに接頭辞（動詞）が機能しているのかを論じているため、文脈の考慮が欠かせない。